

Images of Women in Newsreels of Wartime and Occupation Japan (1940 – 51)

Hikari Hori

Research Associate, National Film Center, Tokyo

Scholarship on wartime media tends to stress 'particularities,' such as depiction of the war effort, praise of motherhood, and use of images of the Emperor and Empress as metaphors for the 'family state.' In this context, Nippon News, an official weekly newsreel that began production in 1940, has been treated as an example of wartime propaganda. Breaking with this approach, I examine newsreels made both during wartime and during the Occupation era in an effort to uncover the nature of gender politics in these periods.

Even after the war, Nippon News continued to report national and social events until 1951, censored first by the Japanese and then by the US militaries. This latter period has been neglected by scholars, but considering it reveals continuities and discontinuities with the early 40's. For example, depictions of ideal 'mother and child' images are absent from both wartime and occupation era newsreels, and women's gender roles are consistently confined to domestic realms, but there is a shift from portrayal of women in groups to a focus on individuals like 'the first female' police agent or congress person, and a reduction in images of the Empress.

Based on studies of women's history in the 40's and 50's, and research into female images in films, I suggest that both continuities and shifts were marked by state control of and surveillance over female bodies, prohibitions on visualization of state intervention into women's lives ('invisible' issues categorized as 'private' but in fact subjugated to the public sphere), and polarization of gender roles in society.

戦中・占領期公的メディアにおける女性像の変遷 ——『日本ニュース』が描く「働く女性」と皇后を中心に——

堀 ひかり

(東京国立近代美術館フィルムセンター客員研究員)

はじめに

<戦争とメディア>を語る時、そこには暗黙のうちに、戦時期のメディアが、戦時期ゆえの特殊性を帯びている、という前提が織り込まれているのではないだろうか。戦中と戦後という時代区分は、封建的・圧制的／自由主義的・民主的、女性抑圧的／解放的などと対立的に捉えられることが多い。映画史研究においても、戦争によって社会や映像が大きく歪められ、変質するという考え方は散見される。確かに、敵国や植民地を自国に都合の良いようにステレオタイプ化することが、戦時に突出するのは否めない。¹⁾

しかし、「戦後、女と靴下は強くなった」と揶揄されるような劇的な転換は果たしてあったのだろうか。フェミニズムの観点から再検討すると、歴史にこうした断絶のイメージだけではなく、戦中と戦後の連続性を見て取ることもできるのではないだろうか。つまり、戦時期の特殊性と見えるものも、女性というカテゴリーに配分されるジェンダー規範という点では、同一線上にある種類の違いにすぎない場合もあると考えられる。そこで、本稿では『日本ニュース』(1940-51年)²⁾というニュース映画をとりあげ、女性イメージの変遷を追いながら、女性像の変化と同時に、戦中・占領期を通じて一貫して規範的に呈示される女性像をさぐりたい。

素材として『日本ニュース』を取り上げる理由は以下の二点である。第一に、近年、戦時下の女性像について紙媒体の事例研究がすすんでいる一方で、³⁾ 同時期の映像に着目した研究はほとんど試みられていない。そこで映像におけるイメージの分析が、女性の表象の歴史の検証の作業に、ささやかながら追加的な情報をもたらすことができるのではないかと考えるためである。第二に、女性像やジェンダー規範を軸に、また、従来見過ごされてきた占領期のニュースをも視野にいれ、既存の映画史研究で限定的な扱いや分析の対象となってきた『日本ニュース』を、読み直すことができるためである。映画史における既存の研究は、戦中のニュースのみに焦点をあて、天皇制の特殊性や戦時期独自の国家観を反映するメディアと捉え、「一般」国民へ向けられた映像のプロパガンダ性を強調してきた。⁴⁾ 確かに、『日本ニュース』が国民としての一体感を醸し出すような体育大会、戦意高揚的な場面や、戦闘とそれに続く戦勝シーン、自国軍の行為の正当化など戦争支持の世論づくりに貢献したことは指摘されるべきである。しかし、提示された国民像も、想定された観客も、決して「一般」国民という均等な集団ではなかったはずである。そのため本稿は常に、映像をジェンダー化されたメディアとして扱うこととする。

また、『日本ニュース』が、戦時と占領期の女性像——ニュース製作者が公的空間で呈示するべきだと考えた女性のイメージ——の変遷を探るための、有益な資料となる理由は主に二点ある。第一は、『日本ニュース』が、太平洋戦争期からアメリカによる日本占領終結に近い時期まで12年間連続して製作され、なおかつこの時期に製作・定期発行されたほぼ唯一のニュース映画という現存資料であるためだ。このため他のニュース映像とは異なり、全体を通覧し、変化について考察することができる。第二に、『日本ニュース』が、戦中・占領期の両方において、政策決定者の直接的、間接的検閲を受けたものであるため、⁵⁾ その時点での政府にとって望ましく、違和感のない公的な女性像がいかなるものであったかを探るのに適しているためである。⁶⁾

本稿では、第一に、「実写」映画の歴史を概観し、『日本ニュース』の成立について述べ、第二に、戦時下・占領期の『日本ニュース』の女性像を分析する。そして、最後に女性像の変遷の意味を検討するとともに、今後の課題について触れたい。

1. 『日本ニュース』(1940 - 51年)の成立

1) 「実写」フィルムからニュースへ

国内で製作された記録的な映画、いわゆる「実写」フィルムの歴史は1899年に遡り、その最初のフィルムが捉えたのは東京市街と芸者の手踊だったという。⁷⁾ フィルムというメディアがその最初期から、^{スベックフル}見せ物としての女性の身体を捉えていたことは注目に値する。その後、日露戦争(1904年)、南極探検(1911年)、皇太子渡欧(1921年)、皇太子成婚(1923年)、関東大震災(1923年)などの報道をへて、「実写」フィルムは啓蒙目的の教育映画や記録映画(当時の呼び名でいう「文化映画」とニュース映画という二方向に枝分かれた。

見知らぬ土地を「客観的」に分類・評価する、エキゾチックな風物への好奇心にあふれた、「観光」的なまなざしが植民地主義的な欲望に結びついた文化映画は、1930年代に多くの観客を動員した。「日本人全部が見るべき国家的映画で、しかも南洋常夏の夢の島の全貌を描いて」いるとされたヒット作品『海の生命線』(横浜シネマ商会、1933年)、長期ロケによって樺太・千島列島を国防上の重要地点であることを示した『北進日本』(横浜シネマ商会、1934年)、「満州」熱河省の自然・風物を捉え優秀映画ベストテンに入選した『秘境熱河』(満鉄弘報部、1936年)、軍艦「足柄」のイギリス、ドイツ訪問と帰還途中の日中戦争の勃発を含んだ記録映画で、白井茂撮影、亀井文夫編集の大ヒット作品『怒濤を蹴って』(P. C. L、1937年)などがある。

ニュース映画の詳細な歴史は、現存フィルムが部分だけであったり、関係資料も少なく、その全貌を掴むことは難しい。定期的に発行され、時事をとりあげ、複数のニュースから構成された短編映画をニュース映画と定義するならば、定期発刊が行なわれ、ジャンルとして定着した先駆けを『松竹ニュース』(1930-35年)にみることができる。その後、『朝日世界ニュース』(1934-40年)など、新聞社系の会社が相次ぎ設立されるが、戦時期のメディアの統廃合で、1941年5月に社団法人日本映画社(1940年4月発足の日本ニュース映画社を改称)に一本化された。⁸⁾

ニュース映画が大変な人気を呼ぶようになったのは、1937年日中戦争をきっかけとしている。

各社はこぞって「我が無敵皇軍」の勇壮な戦いを前線で撮影し、そのフィルムは上映され、戦勝ムードを盛りあげた。もっとも、前線での激しい銃撃戦の音などは、始まったばかりの同時録音の技術では集音できても、映像の完成にあたって満足な効果とならなかった場合もあり、日本のスタジオで臨場感溢れる音響を後からつけたことも少なくない。また、ナレーションを先に作成しておき、届いた映像をそれに合わせて編集したこともあったという。⁹⁾

『日本ニュース』は、1940年6月11日封切りの第1号(図1)以来、1951年12月27日まで、戦争末期をのぞきほぼ週刊で作られた。1940年から1945年12月31日の6年間に264号が製作され、戦後の同じく6年間、1946年1月10日の第1号から51年末の312号で終刊となるまで、12年間で合計576本のニュースが製作されたことになる。¹⁰⁾

1本の長さには若干増減があるものの、戦時中のものは約10-15分、戦後は7-8分ほどのものが多い。戦時中は映画会社の統合により唯一のニュース映画となり、軍部の検閲を受けつつ、社団法人日本映画社が製作した。戦後は民主化と視点の刷新が謳われたものの、『日本ニュース』というタイトルは変わらず、左翼映画人の岩崎昶などが新たに関与したとはいえ、カメラマンや編集者などスタッフは戦時中からの顔ぶれも多かった。¹¹⁾ 占領下で株式会社日本映画社へと組織を再編し、米軍の検閲を受けつつ製作された。上映形態については、戦中・戦後を問わず、文化映画・劇映画との併営で劇場公開という形が基本で、ニュース映画と文化映画の併映、地方への巡回もあった。

¹²⁾

2) ‘一般’観客とは誰か

『日本ニュース』の女性像の具体的な分析に入る前に、映像が想定した観客のジェンダーについて触れておきたい。

今まで指摘されてこなかったことであるが、紙メディアが漠然と男性読者を想定した‘一般’雑誌と女性雑誌に分かれていたように、映像においても、女・子ども向けの時事的な番組が存在し、観客がジェンダー化されていたことは注目に値する。その一例は、朝日映画製作社(1943年より朝日映画社と改称)製作の『アサヒホームグラフ』である。これは、もともと1938年9月に開始された月2回の『コードモグラフ』を、1939年10月から改題した番組であった。現存フィルムは多くないが、例えば『アサヒホームグラフ』第53号(1940年10月31日)の内容は「牧場の秋(神津牧場)／愛子ちゃんは兵隊さんが大好き(定山溪)／炭焼く中でも理科の勉強(大阪府北河内郡岩船山)／象君の防空訓練(神戸諏訪山動物園)／子宝万才(東京小石川)」というラインアップであり、「実写」フィルムに説明をつけた教育番組的な構成となっているようである。現存する各号はいずれも、子どもや同伴の母親を観客と想定しているらしく、戦意高揚記事や教育的な知識を日常的話題に求める構成である。上映形態についての詳細は不明であるが、例えば、新宿映画劇場では1942年2月12日から18日に、『アサヒホームグラフ』(号数不明)『或る保姆の記録』(芸術映画社、1942年)『これからの育児』(不明)の三本立て興行が行なわれていたと記録されているところから、¹³⁾ 原則的に文化映画——特に、女・子どもを主題・想定観客とした作品——などと併映されたと推測される。

『アサヒホームグラフ』の内容をみると、子どもと同伴の母親を観客として意識したプログラムづくりが製作側・上映側の両方の念頭にあり、「女・子ども」が教化対象として、一括りのカテゴリーとしてみなされていたと考えることができる。『アサヒホームグラフ』は、1941年の時点で『日本ニュース』には統合されていないが、ニュースではなかったというジャンル上の理由に加え、政府のメディア統合において、ある時点まで「女・子ども」の教化と「一般」観客の教化という二本立ての政策がとられたためと推測できる。

「一般」観客に向けられた映画の言説空間では政治的動向、前線の様子、国民的な体育大会などが公的空間を表象する一方で、こうした天下国家のイメージの添え物として「女・子ども」のイメージが用意されている。「女・子供」は、あらかじめ彼女たちのためのメディアを通じてカテゴリー化され、同時に「一般」向けの映画の言説の内なる外部ともいうべき位置から、国家の要請に応えるよう期待された二重に囲い込まれた観客集団と考えることができる。

2. 『日本ニュース』の女性像の変遷について

1) 戦中の『日本ニュース』

『日本ニュース』第1号は、「天皇陛下 関西御巡幸」で始まり、戦時中の主なニュース項目は、天皇の動向、体育の競技会を通じた健康、強靱な精神と肉体の称揚、祝祭による国民の一体化といったイメージの発動、アジアの解放者としての日本の自己宣伝、誇張された戦果などであった。

こうした中で、戦時期『日本ニュース』全フィート数に対して、女性を特集したフィート数は極めて少ない。この希少な女性イメージの多くは、ニュース内の「週刊話題」というコーナーで扱われた。このコーナーは、美術展など文化的な催しや、少年たちの軍艦見学など短いニュースから構成され、政治的なニュースに彩りを添えるという位置付けである。ここに現われた女性像は、靖国神社参拝の戦没将兵の未亡人、電信電話交換手など「職業婦人」、体操をする女学生などである。

しかし、1943年になると、代替労働力としての女性の姿が独立した記事としてフィート数を費やされて紹介されるようになり、戦中のニュースの全フィート数において女性に割かれたフィート数を検討すると、戦時中の映像における女性像は、働く女性のイメージに集中していることがわかる(表1)。また、フィート数自体は多くないが、特殊な位置付けを与えられ、単独で記事となることもある皇后のイメージを見逃すこともできない。そこで、本章では働く女性たちと皇后を中心に考察することとする。

「働く女性」のイメージが一本のニュースのなかで、独立した項目を与えられるのは第78号が最初であるが、この時点では緊迫感は薄い。戦況が好転していた1942年には「働く女性」は現われず、女学校の慰問袋づくりが紹介される程度であるが、¹⁴⁾ 戦況が悪化する1943年末から各号の全フィート数における「働く女性」のフィート数は跳ね上がり、44年第195号「決勝へ」の女子挺身隊の映像は、その号のフィート数のほとんどをしめる。¹⁵⁾ そもそも、『日本ニュース』で、女性がニュース素材になること自体が少なかつた上に、それまでの女性関連記事が長くても98フィー

ト程度だったことを考えると、続く第212号「生産挺身」、第222号「女性戦線」、第228号「女子航空挺身」など、1944年に働く女性の姿が映像に溢れ出したことはまったく新しい現象だった。¹⁶⁾

こうした女性像からわかることは、いずれも集団で働く若い挺身隊がモデルとなっている点である。あくまでも若い女性を選ばれているのは、以下の二つの理由からと考えられる。第一は、わざわざスクリーンに映すなら、若くてみずみずしい女性の方が「絵になる」というあまりに単純な理由。第二に、女性と労働の関係を、女性の仕事は生計のためではなく、ヴォランティアでなされるべきものと捉えるためであろう。ライリーが指摘したように、女性の戦時労働は、あくまでも「女の」労働とみなされ、少女的なイメージを伴う。¹⁷⁾ 映像では、農村・漁村などで生業についている年配の女性や、工場で賃金労働をする中年女性は映されない。¹⁸⁾ また、もともと工場で働いている労働者階級の様々な年齢層の女工ではなく、動員された中産階級の子女のイメージが強く打ち出される。このように、本来、家庭に在るべき未婚の女性たちが、非常時ゆえに代替労働力として働いているものとして描かれることで、女性の行う労働が、補助的・代替的なものであるとして価値づけられる。とはいえ彼女たちの働きは確実に当てにされている。

例えば、第185号「女子機械工補導所 東京」(図2)のナレーションは、この時期、女性に期待された役割を如実に示している。勇ましく、たたまこむような男性のナレーションが以下のように呼びかけるのである。

- 「東京カンダ橋女子機械工補導所では、直接軍需工場に勤労の赤誠を捧げんものと若き乙女たちが油にそまって、旋盤やスライス盤にとりつき、工作機械の技術の習得に励んでいる。新しい時代が戦争とともにやってきた。こうして、日本の女性美が工場の真只中から生まれてくるのだ。敵米英ではすでに1300万の女性が生産に従事している。これに対し、日本女性の覚悟は良いか。前線で父が、兄が、そして弟が、船を飛行機を送れと叫びつづける声をしっかり胸に、そのもてる勤労の全てを尽くして、勝ち抜こうではないか。」

ここで、女性は父や兄弟のために働くことで、国家に貢献することができるとされる。とはいえ、「夫」という言葉が除外されていることから考えると、既婚女性は、このような公的空間の仕事からは除外され、家の周りで、子育て、家庭菜園づくりや防空演習などに勤しむことが言外に奨励されることになる。¹⁹⁾

次に、注目すべき女性像として皇后の記事がある。彼女は戦時労働に従事する女性たちが集団で働いている情景と対照的に、常に個人として映像のなかに居場所を与えられた。

皇后の表象についての研究自体が端緒についたばかりで、単独の行啓の記録はまだ不明な点も多いが、少なくともニュース映像の中では、戦時中に皇后は天皇の同伴をする形で12項目、単独では7項目報道されている。皇后は単独で女子高等師範を見学し、傷病兵を見舞い(図3)、伊勢・橿原神宮・靖国神社を参拝し、陸軍造兵廠・農村を視察している(表2)。

ここで皇后が果たしている役割は、妻として夫に同伴するという職務のほか、女子教育の視察、病人の見舞い、銃後の諸生活の視察であり、こうした皇后に与えられたジェンダー・ロールは、先行研究が示すように、明治期に天皇のイメージと対で形成された皇后の妻役割を踏襲しているもの

と考えられる。²⁰⁾

加えて、ニュースが見せた集団で働く挺身隊の女性たちと、単独の皇后のイメージを比較すると、後者は規範的な女性像として機能していると考えられる。前述したように、働く女性たちのイメージには、彼女たちの本来の居場所は家庭であるという含意があった。この含意を可視化すべく、皇后など高位の女性の活動は、「本来の」女性の役割のメタファーとして提示されていると読める。本来の女性の社会的役割とは、夫に同伴し、子供教育に気を配り、家族の介護をする点で、いうなれば「専業主婦」であろうか。国家の非常時に駆り出されている女性の実情に対して、皇后のイメージは、望ましい女性の社会的役割を常に示し続けている。

2) 占領期『日本ニュース』

戦後の『日本ニュース』は、一本のニュースの構成が天下国家を語る政治的ニュースと「時の話題」の組み合わせであり、戦中の「週間話題」が「時の話題」と名前を変えただけで、基本的な構成は同じである。女性は「時の話題」で扱われることが多く、婦人警官、労働運動のデモの一員、おいらん道中・ミスコンテストの主演などとして登場する。では、占領期の「働く女性」や皇后のイメージはどのように変化したのだろうか。

「働く女性」についていえば、戦後の働く女性たちは、警官、刑務所長、議員、弁護士など「女性初」という観点から手短かに紹介されるものが多い。

敗戦直後の日本における「婦人警官」のイメージは、ニュースでも折々紹介され、街を闊歩し、軍隊のパレードにも参加する米軍女性将校が喚起する、外国風で、逸脱した印象を重ね合わせられたことだろう。彼女たちの制服姿には、女性の社会参加のシンボルも読み込まれていたはずである。また、占領軍の女性解放政策の影響により、参政権を得て新たに当選した女性議員が、女性解放や権利について語るという場面もあるが、こうしたエリート女性は名前を紹介され——通常ニュースにあらわれる人々は政治家もしくは犯罪者でなければ無名である——、(男)社会に参入した稀有な女性たちという意味付けがなされた。

「働く女性」が、単に集団的な労働力ではなく個人として扱われ、場合によっては発言の場を与えられたのは、敗戦直後(1946-47年)の特徴である。しかし、女性解放の空気を伝える映像はその後徐々に減っていく。

皇后像についても変化がある。

天皇・皇后関係の記事は、戦時中は順序としては第一番目に報道されなければならなかったが、戦後は「時の話題」に入れられ、観客がスクリーンに脱帽する必要はなくなった。しかし、天皇関連記事が数の上で減らなかったことと比較し、²¹⁾ 皇后の単独記事は7項目から、戦後には2項目へと減少すると同時に、天皇に同伴する記事が増えた(表3)。全体の印象として、戦後、皇后は天皇に寄り添い、その独自の活動は不透明になる

こうした皇后像の変化の分析にあたって、北原による日本独立前後に「ご一家」として形成された皇室像についての議論が参考になる。北原は新聞写真の分析を行なうことで、リン・ハントのいう「政治的秩序形成における家族の重要性」にふれながら、公的に成立した「プライベートな」

皇室像が、正月の新聞を通じて流布される——まさに第二の「御真影」ともいえる——地点を論じている。²²⁾

占領終結期のそうした表象空間の変化は、『日本ニュース』において、独自の社会的な活動を行う女性が、夫に付き従う妻として表される(天皇・皇后の夫婦像)変化と対応していると思われる。つまり、国家のあり方のメタファーとしての天皇家の視覚的なレトリックが再編成されたのである。戦中に使われた「赤子」という言葉が連想させる天皇と臣民との父系的かつ直接的なつながりが捨て去られ、戦後の『日本ニュース』が示すような、皇后は天皇のかけによりそい、そこに時折皇太子が加わるというなごやかな家族像が日本のあらゆる家族のモデルとなりえるという演出への変化である(表3)。

妻が後景に控えているこの新しい家族イメージは、北原が示したような新たな「御真影」ともいえるべき国民統合のシンボルである。「家族の絆」というメタファーは近代国家の構造と鏡像関係におかれ、表象レベルでも政策施行においても動員されてきたが、天皇や皇室イメージは、敗戦をはさんでもなお、修正を加えることで国民統合のシンボルとして生き延びたことになる。

戦中と戦後の女性像を、「働く女性」と皇后像から検討すると、その変化を以下のようにまとめることができる。第一は、働く女性に割られるフィート数の割合が戦後に激減した一方で、戦後の方が女性の仕事に多様性が与えられている。ただ、議員などのエリート女性が女性としては特異な存在として扱われ、「男まさり」として描かれる。第二は、皇后の単独イメージが後退しつつ、天皇一家像の一部へ吸収されることである。映像における皇后像の変化や先行研究の示す新聞記事分析をあわせて考察すると、敗戦を期に、視覚文化における家族国家観の規範が、天皇と臣民が直接に繋がる父系的なモデルから、天皇一家像が国民の各家族とアナロジーを成すモデルへと変化したといえる。

このように見ると、政策策定者の意向を受けたニュース製作者が描く女性のイメージは、例えば、戦中は抑圧的であり戦後は解放的であるといった分類には当てはまらず、極めて多様は姿をみせることが明らかである。戦後に「女性初」の仕事を持った活躍する女性は華やかではあるが、あくまでも例外、逸脱として捉えられているし、戦中はそれなりの独自性をもった皇后像が、戦後は影が薄くなり家庭におさまっている。それにも関わらず——あまりに単純な図式で、指摘するまでもないのかもしれないが——、戦中・戦後の共通点は存在する。それは女性が仕事をするという事態は特異だという意味づけと、理想的には女性は家庭にいるものであるという規範的イメージである。

おわりに

本稿では、戦中・占領期に、公的なメディアであった『日本ニュース』の女性をめぐるイメージがどのようなものであったかを、「働く女性」と皇后を中心にを手がかりとして検討した。戦中・戦後の女性イメージの共通点、言い換えれば、戦中の日本政府や占領軍が望ましいあり方として発信したのは、家庭の中心となり、労働力としては補助的で取り替え可能という女性像といえる。

このような戦中・占領期の映像に共通したジェンダーによる役割分業を歴史的コンテクストにお

くならば、落合が「家族の戦後体制」の一つの特徴としてあげる「女性の主婦化」²³⁾つまり階級を問わず、全ての女性が専業主婦を目指すという主婦の大衆化への過渡期を記録しているといえないだろうか。

その傍証をあげるとすれば、本稿では十分に触れられなかったが、戦後の『日本ニュース』でたびたび登場するようになった、食糧を始めとした物資不足とインフレによる生活苦を訴える「主婦」の姿である。ニュースで街頭インタビューをうける彼女たちは、「家庭をあずかる主婦」である自分が、「台所」からの声として世間にモノを申す。男の変形版である女性エリート以外に、女性が発言する数少ない映像はこのような主婦の声であり、主婦連などの動きとあいまって、「主婦」という女性の役割がメディアにのり、消費者として目に見える社会的存在となった。

ところが、女性にとって公的領域（ニュース価値）へのアクセスは、私的領域（家庭）への貢献、つまり女性に与えられた家庭内の役割を遂行することで可能になるという図式は、近代国家における国民としての女性の位置のジレンマを示している点において、戦中から引き継がれている。とすれば、1944年11月の女子徴用実施の厚生省通牒、続く1945年6月の国民義勇兵役法公布まで、政府が頑なに守った「女性の居場所は家庭」という態度は、²⁴⁾皮肉にも、戦後のニュースに現れる「主婦」たちによって、女性自らの言葉で主体的に語り直されるにいたったのである。²⁵⁾

今後の課題は、女性の主婦化が進行していくことと、『日本ニュース』という一種の政府の公式見解が女性について示した以下の特徴をどのように女性の歴史というコンテキストに置いて論じることかである。それは、『日本ニュース』には、一貫して母子像が現れないことである。若桑は、戦時下の女性雑誌に繰り返し現れる母子像——靖国神社に参拝する母と子、子どもを抱き上げる母など——を、兵士になれない女性が子どもを産むことによって国家に貢献するという、女性の内発的な国家への同一化を誘う視覚的装置であると指摘しているが、²⁶⁾こうした母子像が官製ニュース映像で欠落していること、それにも関わらず政府が常に生殖政策に関心を寄せていたことをどう考えるべきなのか。政治的関心事が、視覚の表象の空間に現れないということについて考察したい。²⁷⁾

注

- 1) 『日本ニュース』を中心にとりあげるため、本ニュースの製作時期と合致している太平洋戦争期を「戦中」とよぶ。
- 2) 川崎市民ミュージアム映像部門「日本ニュース映画史研究講座：ニュース映画から見る昭和史」<http://home.catv.ne.jp/hh/kcm>を参照。川崎市民ミュージアム・ビデオライブラリーでは、戦中戦後の全号（欠号を除く）を閲覧することができる。また、同ミュージアム映像部門では当時のカメラマン、映画編集者、軍関係者への聞き取りを含む多面的な研究がすすめられている。
- 3) 若桑みどり『戦争がつくる女性像 第二次世界大戦下の日本女性動員の視覚的プロパガンダ』

筑摩書房、1995年；木村涼子「『主婦イコン』の誕生——美人画と婦人雑誌——」『人間関係論集』（大阪女子大学紀要）No. 17、2000年、73-99；加納実紀代「『大東亜共栄圏』の女たち『写真週報』に見るジェンダー」『戦時下の文学——拡大する戦争空間』文学史を読みかえる4、インパクト出版会、2000年。

- 4) 奥平康弘「映画の国家統制」佐藤忠男ほか編『戦争と日本映画』講座日本映画4、岩波書店、1986年；Hara, Mariko. "How Far Are Japanese Wartime Newsreels Reliable Academic Sources?," *ICONICS (Journal of the Japan Society of Image Arts and Sciences)*, Vol. 5, 2000, 73-92；Purdy, R. W. "Projecting East Asia: Japanese Wartime Newsreel Depictions of Daitoa," Association for Asian Studies annual meeting, 2001, unpublished paper；奥村賢「戦時期における日独ニュース映画の関係——表現面についての中間報告——」『映画学』（早稲田大学映画学研究会誌）、2001年、54-64。
- 5) 検閲の実態について、どの程度の指導が、どのレベルで製作現場に関わっていたかを知るための詳細な資料はない。しかし、映像を検討すると、撮影されている場所やテーマは限定されており、何をどう写すかについての自主規制及び政府からの要請はかなり厳しいものと考えられる。例えば、戦中の小学校の授業風景一つとってみても、映っている子供達がかかなり身奇麗で、シナリオを読み上げるような発言をしている。また、占領期にしても『日本ニュース』における朝鮮戦争の映像は、原則的にアメリカ軍部からの提供されたものであり、米軍のための宣伝メディアという役割を担った側面もみとめられる。
- 6) 占領期の米軍における規範的女性像については以下を参照。ファー、スーザン「フェミニストとしての兵隊——占領下における性役割論争」国際女性学会編『国際女性学会 1978年東京会議報告書』1978年、13-17。
- 7) 田中純一郎『日本教育映画発達史』蝸牛社、1979年、特に319参照。
- 8) 註7の田中『日本教育映画発達史』；濱崎好治「ニュース映画の考古学1」『川崎市民ミュージアム紀要』第11集、1998年、19-53参照。
- 9) 川崎市民ミュージアム映像部門における、従軍カメラマン浅井達三氏、編集者中村正氏への未公開の聞き取り調査による。
- 10) 小笠原基生ほか編『別冊一億人の昭和史 改訂版 日本ニュース映画史 開戦前夜から終戦直後まで』毎日新聞社、1980年。
- 11) 大島源次郎『ニュースカメラマン 決死従軍記』愛亜書房、1943年；藤波健彰『ニュースカメラマン 激動の昭和史を撮る』中央公論社、1977年；東京国立近代美術館フィルムセンター編「図 ニュース映画、文化・記録映画プロダクション系譜」『NFC ニュースレター』18号、1998年、4-5。
- 12) 敗戦後は『日本ニュース』のほか、アメリカのニュース映画も輸入され上映されるようになるが、本格的に日本の会社がニュース映画製作に参入したのは、アメリカ側の検閲体制が変化した1949年以降であり、『国際ニュース』（1949年創刊、後に『読売国際ニュース』に改称）などが発刊され、劇映画などの長編映画の前に上映された。

- 13) 『映画旬報』1942年3月1日号、40
- 14) 加納(註3)によれば、戦況が悪くなると女性像が増えるのは、『写真週報』の写真イメージにもみられる現象である。
- 15) 1944年8月は女子挺身勤労令が施行され、12歳以上40歳未満の選抜された女性が、女子挺身隊として一年間の勤労を行なうことが法制化された。女性挺身隊に関しては以下の文献を参照。佐々木陽子『総力戦と女性兵士』青弓社、2001年；鈴木裕子編『日本女性運動資料集成 第6巻 生活・労働III』不二出版、1994年。
- 16) 当時の文化映画でも、挺身隊以外の女性の労働もしくは職業をテーマとしたものはそれほどなかった。堀ひかり「厚木たかと『或る保母の記録』——戦時下の「働く女性」たちと抵抗の表現をめぐる」『映像学』(日本映像学会誌)66号、2001年、23-39、特に32-34参照。
- 17) 女性の戦時労働が、あくまでも二義的な位置付けをされることについての他国の例として以下を参照。Reilly, Denise. "Some Peculiarities of Social Policy concerning Women in Wartime and Postwar Britain," Margaret Randolph Higonet et al. (ed.) *Behind the Lines: Gender and Two World Wars*. New Haven and London: Yale University Press, 1987、特に260-261；Montgomerie, Debora. *The Women's War New Zealand Women 1939-45*. Auckland: University of Auckland, 2001.
- 18) 戦時期の働く女性像は、もともと共働きであった女性をも、代替労働であるかのように表現することがある。例えば文化映画『漁婦』(読売新聞社、1940年)では、漁婦があたかも非常時に夫の代わりを勤めているかのように描かれているが、農業・漁業などの第一次産業は基本的に夫婦共働きのはずである。
- 19) もっとも、第163号(1943年7月20日)で紹介された、第四回中央協力会議常会での山高しげりの発言は、配給による行列が女性の貴重な時間を無駄にし、女性が国家に忠誠を尽くすために社会で働く機会を奪い、結果的に国家の損失となっているというものであった。戦前から女性参政権運動など、女性の社会的地位の改善・向上に関心を持つ山高が、女性側の視点として、既婚女性の社会参加に否定的な政府を批判する図式が示されている点は興味深い。後に、根こそぎ動員となっていく経緯を、フェミニスト言説が支えている例といえる。また、公的空間でスピーチをする女性としては、山高の例が戦時は唯一である。鈴木裕子編「中央協力会議の会議録から」『日本女性運動資料集成 第10巻 戦争』不二出版、1995年も参照。
- 20) 片野真佐子「近代皇后像の形成」富坂キリスト教センター編『近代天皇制の形成とキリスト教』近代天皇制を考える1、新教出版社、1996年；Hastings, Sally A. 「皇后の新しい衣服と日本女性、1868-1912」時実早苗訳『日米女性ジャーナル』No. 26、1999年、3-14；若桑みどり『皇后の肖像』筑摩書房、2001年
- 21) 戦中の天皇記事は49項目、戦後は47項目であり、フィート数は減っているが、項目数はほぼ同数であり、ニュースが天皇に寄せた関心が、状況は異なっても揺るぎないものであることがうかがえる。
- 22) 北原恵「正月新聞に見る<天皇ご一家>像の形成と表象」『現代思想』vol.29-6、2001年、

- 230-254；リン・ハント『フランス革命と家族ロマンス』西川長夫ほか訳、平凡社、1999年。
- 23) 落合恵美子『新版 21世紀家族へ』有斐閣選書、2000年。
- 24) 註15にあげた佐々木(2001)、鈴木(1994)参照。
- 25) 家庭での母・妻役割を勤めることが女性の社会参画につながっている考え方は、山高しげりが創設した桜映画(1955年-現在に至る)——「お母さんプロダクション」と呼ばれた——の、公衆衛生へ主婦が積極的に関与する映画づくりなどにも観取できる。村山英治ほか編『桜映画の仕事 1955→1991』新宿書房、1992年を参照。
- 26) 註3にあげた若桑(1995)参照。
- 27) 戦後の『日本ニュース』は女性の性的魅力を描き、ニュースの構成に組み込むようになっていく。花嫁修業の一貫として半裸で水垢離をする女性やおいらん道中、ミス・東京などのビューティ・クイーンが、短い記事ながら定期的に現れるようになり、戦後の「性の解放」という言葉のもとに、ヘテロ男性の視線が「解放」されたことを物語る(図4)。

参考資料

(※) 号数の「新」は、1946年1月からのニュース

表1 働く女性の主なイメージ

(※女性主題でフィート数の多かった記事、もしくは類似テーマで反復された記事を中心に選択した。)

号数	年月日	全ft	ft	小見出し(報道順/全項目数)	内 容
新 227	1950.5.16	265	19	「子どもの日」(3/3) 「働く母親の工事現場託児所(東京)」	
新 281	1951.5.22	255	16	「時の話題」(1/4) 「米婦人部隊記念日(東京)」	

号数	年月日	全ft	ft	小見出し(報道順/全項目数)	内 容
78	1941.12.2	334	28 37 33	「逞しき進発 女性戦線愈々堅し」	大日本国防婦人会による前線慰問／タイプライターの技能教練会／女学生の育児実習
154	1943.5.18	323	57 29 54	「戦ふ女性」	農村女性の牛耕競技(新潟)／航空機生産に励む女性／活躍する女子通信隊員
185	1943.12.20	268	148	「戦ふ前線銃後」(3/5、4/5、5/5)	女子防空監視隊(大阪)／軍服を縫う女子挺身隊(東京)／女子機械工補導所(東京)
195	1944.1.26	306	263	「決勝へ」(1/2)	女子挺身隊 兵器生産へ
212	1944.6.22	327	107	「生産挺身」(3/3)	海軍衣糧廠で軍服を縫う女学生
222	1944.8.31	365	182	「女性戦線」	車掌・操車掛に女子鉄道員／飛行機工場に働く女子挺身隊／女性の職場 製薬工場
228	1944.10.12	279	102	「女子航空挺身」	新司偵を整備する女子挺身隊／女学校の教室で補助タンク生産(岐阜)
新 10	1946.3.21	325	25	「婦人警官が生まれます」	
新 27	1946.7.18	274	46	「“働く婦人の声を” 民主主義婦人大会(東京)」	
新 63	1947.3.25	239	14	「時の話題」(1/3) 「二人の婦人知事候補(滋賀・埼玉)」	
新 121	1948.5.4	268	17	「時の話題」(2/4) 「女仲辻はどこへ」	労働基準法実施により職を失う女性
新 173	1949.5.3	268	49	「看護婦さんハンスト」	

表2 皇后のイメージ

号数	年月日	全ft	ft	小見出し	内 容
27	1940.12.10	382	42	「脱帽 皇后陛下 女子高等師範 行啓（東京）」	12月3日 東京女子師範学校
44	1941.4.8	354	37	「脱帽 長くも皇后陛下白衣の勇士を御慰問（神奈川県）」	
50	1941.5.20	384	51	「脱帽 皇后陛下 伊勢神宮 橿原神宮御直拝（三重・奈良）」	
131	1942.12.10	360	61	「脱帽 畏し 皇后陛下 陸海軍病院行啓（横須賀・東京）」	
155	1943.5.25	359	53	「脱帽 皇后陛下 陸軍造兵廠行啓」	5月19日東京板橋第一陸軍造兵廠を訪れ銃後の戦う女性を激励。廠内の保育所、展示場で弾丸展示。
159	1943.6.23	307	54	「脱帽 皇后陛下行啓 光栄の銃後農村（東京）」	多摩御陵参拝のあと南多摩農村へ
205	1944.5.4	303	39	「脱帽 皇后陛下英霊に御拝」	
新 49	1946.12.17	335	27	「時の話題」（3/4）「赤十字社 総会ひらく（東京）」	日本赤十字社第54回総会で、名誉総裁の皇后が令旨を朗読「この一年、夫や子どもを失った人たちの悲しみや悩みは十分察することができます。どうしたらこの人たちの心の傷を軽くすることができるでしょうかと、日々心をいためております」
新 228	1950.5.23	278	25	「時の話題」（2/3）「母の日（東京）」	皇太后と皇后に、婦人団体の母親らや約1000人が花束を贈りに、皇居へ。贈られた花束を手言葉ののべる皇后とそれを聞く母親たち。

号数	年月日	全ft	ft	小見出し	内 容
新 96	1947.11.11	277	13	「時の話題」（1/3） 「衛生列車」	皇后、高松宮行幸啓「走る展覧会」 汽車による衛生移動展。三台の客車を改造して、病気の経路、栄養、看病など衛生に関する資料を備え付け全国を巡回する。

表3 天皇・皇后・皇太子が揃う記事

号数	年月日	全ft	ft	キーワード	見出し	内 容
新 41	1946.10.22	274	12	皇太子	「時の話題」（1/4） 「皇太子さんの英語の先生（東京）」	E.C. ヴァイニング夫人
新 172	1944.4.26	273	22	天皇・ 皇后・ 皇太子	「時の話題」（2/5） 「皇居内に貝塚」	発掘する東大人類学教室が貝塚の発掘調査をすすめる。皇太子、義宮も見る。
新 209	1950.1.8	228	23	皇太子	「時の話題」（2/2） 「皇太子さま初すべり」	
新 253	1950.11.14	255	50	天皇・ 皇后・ 皇太子	「早大優勝 東京六大学リーグ」	昭和四年秋以来、二度目の観戦の天皇・皇后
新 274	1951.4.3	306	16	皇太子	「時の話題」（1/3） 「皇太子蔵王へ（山形）」	
新 281	1951.5.22	255	29	天皇・ 皇后・ 皇太子	「皇太后崩御（東京）」	
新 286	1951.6.26	291	80	天皇・ 皇后・ 皇太子	「特報 貞明皇后大喪儀」	天皇が喪主。馬車のあとを天皇が歩き、皇后、皇太子が続く。
新 305	1951.11.6	267	32	天皇・ 皇后、 皇太子	「旅路の天皇・皇太子（広島・青森）」	国体のため広島に到着する天皇・皇后。青森の牧場見学の皇太子。



図1 タイトル (『日本ニュース』第1号、1940年6月11日)

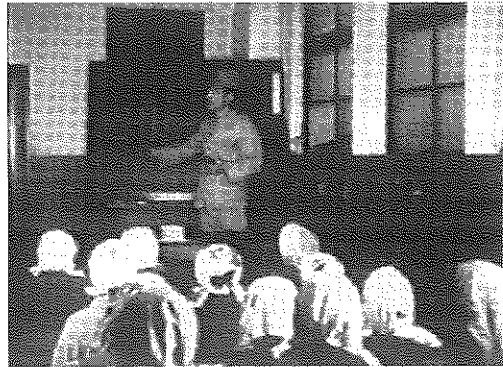


図2 挺身隊 (『日本ニュース』第185号、1943年12月20日)

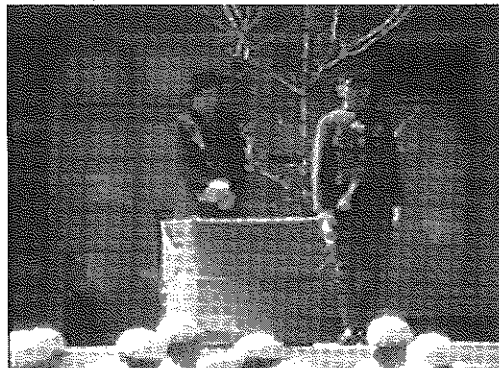


図3 皇后 (『日本ニュース』第44号、1941年4月8日)

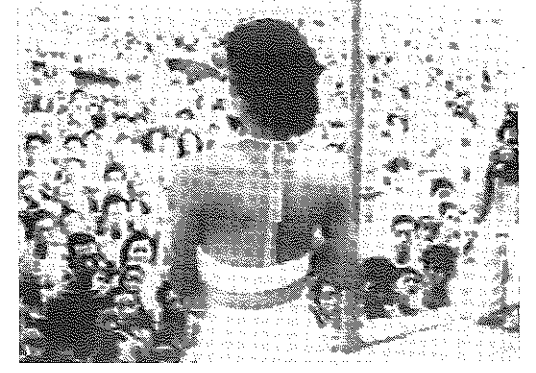


図4 ミス・カーニバル (鎌倉)
(『はだかの女王』『日本ニュース』新第188号、1949年8月16日)

戦中・占領期公的メディアにおける 女性像の変遷

——『日本ニュース』が描く「働く女性」と皇后を中心に——

堀 ひかり